

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

【まちづくりは、ひとづくり】

A,B グループ共通の趣旨の議論	各グループ個別趣旨の議論
<p>(Aグループ)</p> <p>川崎ならではのまちづくりの仕組みや視点というのを持つ。その中でも特に川崎というの、これから新しく21世紀には人のつながりを資本と評価していくような視点でやっていったらどうか。</p> <p>川崎ならではのまちづくり、あるいは川崎市の人つながりという部分で、まちづくり、ことづくりというのは、まず人材を育成していかなければいけない。人材育成が第一で、それに伴って、その人材が実際に活動するための具体的プログラムをつくられていく必要というのがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりは人づくり。まちづくりは人と人とのつながりづくりとも言うが、まちづくりはそこに住んでいる人たちのつながりや連帯が重要。ハード先行ではなくソーシャルキャピタルという考え方もあり、そういう認識を打ち出すべき。 <p>ある調査では、そういう社会資本が高いところでは、防犯子どもの非行などが低い、出生率も高い。住み心地がよく、癒されて、人と人との連帯があるのが重要。ヒューマンウェアが重要（ソフトウェア、ハードウェアに加え）</p> <p>そこに住む人々の連帯感や信頼関係の構築、社会的規範の高さなどが、地域社会の力を育み、暮らしやすさ・住みやすさの指標になる。これからのまちづくりにとって、こうしたソーシャルキャピタル（社会関係資本）の育成こそ重要であるという視点を明確にする。</p> <p>(Bグループ)</p> <p>まちづくりというのは、ハードをつくるのだが、その前に入づくりから始まる。まず、みんなでよく話し合いをしたりして、そしてそれぞれがまちづくりに参加する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まちづくりは人づくり。市民が主体になる。 <p>(全体会での意見交換)</p> <p>市民が例えばごみを減量する方向にやはり一人一人がやらなければならないのだということからも、まちづくりも何でもそうだが、ああしてほしい、こうしてほしいと行政に言うだけではなく、まず我々市民がみずから自分ができることは、市民としてやっていこう、そういう気持ちが大事なのではないか。</p>	<p>(Aグループ)</p> <p>多文化共生をして、みんな違いがあって、その違いを認め合って、仲よく暮らしていけるという視点を持つことで、その人のつながりというのが生まれてくる。</p> <p>他世代ということで、お年寄りだからとか、子供だから、大人はあそこへ行くとかではなくて、みんながいろんな世代が共生する、多文化で他世代が共生していくというところの中で、人つながりという資本を醸成していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川崎のアイデンティティ欲しい。これが街づくりの基本。 ・道路サインの他言語化 ・外国人、障害者...など声を出せない人の声を通じる町へ。住所表示を道路基準に（今は平面的）。住民の声を集めているが活かしているのか・・・都マスの議論をしているが、住民の声を聞いたあと、どう活かして、どう活かさなかったのかの説明がない。自分の意見の行き先がわからなく、むなしさを感じた。 <p>大人の居場所も欲しい。「市民主体」というときの「市民」はだれか。活動している市民は固定化している、これは課題。</p> <p>生活情報が届かない市民がいる。町内会は外国人、単身者等はずしている様子。</p> <p>(Bグループ)</p> <p>王禅寺の焼却場にガス化溶融炉を導入すると、維持費が大変かかり、広域からゴミを集める必要が出てくる。そうしたごみ共生、公益のごみを集めるのではなくて、川崎市内で地元の方で自分たちがごみ減量化を進めるような施策をとる。それが例えばごみの有料化につながったとしても、むしろ市民は今のようなごみの出し方ではなくて、もっと自分たちの身近な資源を有効利用したいということになる。</p>

(凡例) 印 全体会での報告 ・印 グループ討議

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

要求から参加というのは共通な考え方で、受ける時代から、双方にお互いを助け合う時代へ。ハード面が立ちふさがって、ソフト面のバリアフリーを阻害しているのではないか。段差があるのがあるのか、ないのがあるのか。知覚障害者の場合は段差があった場合は杖が使えるという、そういうことも一緒に考えると最後は人である。誰もがデザインだと、ユニバーサルデザインとか、バリアフリーを考える。ノーマライゼーションは誰もが自然に生きられる社会というものがコンセプトで、今世紀はそういう社会にしていきたいと思うが、必ずしもハードだけでは解決できない。外国では、人が援助する、自然に援助する。日本は自然にというのか、頼まれていないのにやるのではなくて、どうしても施しがほしいので、そうではなくて自然にできるような社会になっていって欲しい、していきたい。

町内会も古い体質から結構徐々に変わっている部分があり、多分これからは、一律どういうものがいいかということではなくて、川崎の東西に長いから、課題がみんな、それぞれ地域によって違うと思う。その地域によっての課題を住民と一緒に話し合っ、コミュニケーションを持ってやっていくという方法論をとっていくことが必要なのではないかと。

地域のコミュニケーション力について、人づくりが全てという前提。例えば空き教室に高齢者の人が来れるような空間をつくるか、例えば空き工場になったところをIT産業の場にして、そういうものを生かせるような産業にしていこうか。

町会、自治会による課題を吸い上げる仕組みづくり マンション問題により町会において議論ができるようになって、マンション建設後も住民の交流ができた。一時子育てのときはみんなつき合いがあったが、子供が大きくなってきたら、みんな疎遠になっていたが、また新たな意味で復活できた。そういう点では、何かきっかけがあってまとめる人が出てくるとか、それぞれの課題がぜんぶ違うのではないかと思う。

地域のコミュニケーション力の議論ができたが、現状は自治会や町内会も固定したメンバーで機能していないように思う。

地域マネー等を媒体にして、地域の意識を高めようというアイデアはどうか。

川崎区で導入がされているが、そういう動きを全市に広め、お互いの意識づくりを推進していくことを考えてはどうか。

地域通貨自体は目的ではなく、手段として特定の目的のためにやった方が運用上は良い。

地域通貨の交換は何を目的にするかが重要。街の人が街のことをする事にフォーカスするなら、小規模で始める方がよい。福祉など大きなテーマで遠方の親もふくめてやるなら別の動きになる。

（欠席者）

・区レベル、地域レベルの市民の拠点活動については、その機能が発揮されていない。

市と市民の協力、市民間同士の援助を効率よく進めていくためのソフト、ハード両面の検討をすべき。

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

【学校等、施設の有効活用（居場所づくり）】	
A,B グループ共通の趣旨の議論	各グループ個別趣旨の議論
<p>(Aグループ)</p> <p>居場所がある、子供も大人も高齢者も、あるいはいろんな多様な人たちが、それぞれ自分の居場所があるというまちづくりであってほしい。</p> <p>実は大人の居場所がない。高齢者の居場所もないというのがあって、子供も大人も遊べる町。</p> <p>ストックインフラの有効利用共有化ということで、今までの既にある公共施設を有効に共有化して、あるいは複合的にかかっていけるようなデザインに変えていって、居場所があるような形にしたい。あるいは、小さな公園で使われていないところもあるが、そういうところを居場所化するためにはどうするかという知恵を使っていくべき。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 公的施設・都市施設の機能を「複合化」していくべき。学校は近隣のコミュニティ施設であり、高齢者の憩いの施設になればよい。大人の居場所であり子どもの居場所であり、中高年の居場所にすることを考えるべき。新しい施設の整備は不可能なので・・・。 ・ 防災インター（道路、広場、コミュニティ単位で確保、密集地対応）まちづくりに関する適切な情報公開と市民との会話、歴史を守る等の営み・・・情報公開、ストックインフラ（財産として市民が持っている資産、市民館など）の共有化 ・ 大人も子どもも年寄りも居場所がない。一方使われていない場所が公民館、公園など沢山ある・・・皆の居場所がある川崎市というのがコンセプト ・ 人口増加地域の保育施設、子ども関連施設の老朽化・・・。 <p>目標：子育てバリアフリー、施策：拠点までの道路の安全確保、子どもの遊べる道づくり、自然を残した遊び場、子ども関連施設、公園・・・、プレイパーク（プレイパークはプレイリーダーがいる、プログラムの名前。各区単位でそのプログラムが実施できる場所が欲しい。）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 身近に小さい公園が結構あるが、使われていない。そういうものを集めてもっと鳥が来る、季節の花が咲く・・・という大きな大人が楽しめる公園ができるとよい。小さいものはなくてもよい（難しいが）。 ・ 公園では、大人の体操施設と子どもの遊び場（遊具）がある。大人の遊び場と子どもの遊び場の総合化という意味で、大人と子どもが一緒に行かれる公園が必要。細かいことだが、日本のブランコのイスは木または硬い材質でできているので危ない。韓国では厚い布でできていて、頭を打ってもケガをしないようになっている。そういった子どもへの配慮が必要。 ・ 今ある施設をいかに壊さないか。複合化・有効利用に加え、古いものを壊して新しいものを作るのはどこでもできる。今あるもので建築基準等の面で今は立てられない施設もある。横浜は関内地区の戦前のビルは歴史的建造物保存ということでやっているが、そのような動きが川崎でもやってよい。産業遺産は横浜よりもあるはず。 	

（凡例） 印 全体会での報告 ・ 印 グループ討議

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

- ・地域によって特徴がある。自分の住むところには子どもがない。身近に自分が住んでいるところには何が欲しいのか。美術館は遠くても良い。スポーツセンターは30分くらいのところに欲しいなど、地域にあったものがそれぞれあるだろう。そういう整理をすることが必要。地域で欲しいもの、声を集めていく仕組みづくりが必要
- ・今の若い世代は外で遊ばないので遊び方を知らない。遊び方、自然とのふれあい方を教える必要がある。

（Bグループ）

- 小学校などは、昔に比べてかなり生徒数が減っており、これが空洞化のような形につながっている。小中学校の統合化をすると同時に、空いたところの有効利用をする。
- ・遊び場所を新たに作るのは大変。虹ヶ丘小学校や河原町小学校では生徒数が減少しており、組み替えも出来ない。統廃合すれば空き教室や運動場が有効活用できるようになるだろう。教育委員会はアンタッチャブルというのではなく、そういった内容を総合計画にも反映させていくべき。
 - ・北部と南部では学校に関して事情が異なるようだ。北部では、ある年に教室が突然足りなくなるようなということもある。
 - ・住宅開発が盛んなところでは教室が足りなくなるのだろう。
 - ・教室を開放するのであれば、老人も対象にするべき。
 - ・学校、幼稚園、環境教育なども包括的に考えて、子供が自由に遊べるようにしていく必要がある
 - ・橘樹郡衛のような歴史的財産は是非とも残していきたい。
 - ・公園は整備されているが遊戯が出来るようになっておらず、他にこどもの遊び場所が必要
 - ・子どもに夢がもてるまちづくり（子どもの意見尊重）

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

【交 通（道路）】	
A,B グループ共通の趣旨の議論	各グループ個別趣旨の議論
<p>(Aグループ)</p> <p>道路は今でも歩道が危ないとか、これからもいろいろ道路について改良をしていく必要があるが、道路は人のためにあるということをもまず念頭に置く道路の作り方が必要。</p> <p>道路は人のためにある、人中心ということで考えると、自転車や人というのを中心にしていく歩道、それで自転車で移動が、自転車で行けるとこはなるべく自転車で安全に行けるというデザインをすることで、環境にも優しい町になっていく。</p> <p>防災インフラの整備という視点で、今、人の歩く道が余り重視されないがために逆に車が必要となきに入れないという現象が密集地の中で起きており、人の安全な生活のための道路という考え方をすることで、防災に必要な整備がされることを考えていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常動きやすいような道。通学路に車が入ってきたりする。踏切が開かない等の不具合もある。そういうところをきちっとしておけば、他の施策も回りやすくなる。 ・地域を通過する車をどうするか。地域で暮らす人が動きやすい。何をしても交通基盤は優先なのではないかと思う。通過交通を渋滞なく通すようにすること。日常の渋滞をなくす。 ・ものと心はバランス。トラックも必要だが、入って良いところといけなところは分けて考える。輸送と人が通るといふことのバランスが壊れている。棲み分けが必要。 ・道路は道路法で規格が決まっているが、最低限消防車が入れるような密集地は問題。近所の再開発計画は止まったままで止まっている理由も分からない。最低限密集地には広場と消防車が入れるようなインフラの整備が不可欠と考える。 ・もう一つは「歩行者のための道」安全に快適に歩ける、遊べるくらいのみち、車が遠慮して人が中心の道。それが現状どうなっていて、それをいかにネットワークしていくかが重要。所々に文化的なポイントなど滞在させる仕掛けをつくっていくべき。 ・通過交通が多いので歩道のない道路ができていく。これは1つの大きな課題。 ・「歩道が有ってこそ道路だ」という考えを通すことが重要。今後の道路整備の理念として筋を通すべき。 ・日本に来て、道路があるが歩道がないのにびっくりした。韓国は歩道が先で車道はあと。 ・昔からの地域は農道しかない。そこに歩道というのは難しいとすれば、車を通さないとい 	<p>(Aグループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通問題を身近に感じている。鉄道・交通基盤を整備する必要がある。災害対策や子どもの通勤などにも関わってくる。 ・通過交通は排気ガスしか残さない。そういうものは地下にでも入って欲しい。 ・山手通りは地下道を作っている。桜木町の線路後も公園になる。通過交通はそういう扱いにしてよい。 ・長期的にお金があれば、通過交通は山の中のトンネルを通って欲しい。がそれは10年後の目標ではない。当面は通過する交通はスムーズに通すことを考えなくては行けない。将来的な概念として素晴らしいとしても、5年10年のスパンでできることから考えて行かなくては行けない。 <p>(Bグループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地下鉄よりもミニバスを走らせて欲しい。 ・国道246沿いなど主要道付近が汚れてきている。行政でも調査を行っているが、屋上などに設置した機器で行っているため、人間が受ける影響を測りきれない。246沿いの汚染は車が原因であり、自転車利用に転換していくことが重要。 ・川崎は高速道路などが横断しており、利用者は排気ガスだけを落としていっている。 <p>(欠席者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小杉に新幹線・横須賀線の停車駅をつくり、都の西南域の交通の拠点として川崎の高機能化をはかる。

(凡例) 印 全体会での報告 ・印 グループ討議

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

う発想も必要。

- ・今車優先の道路は高度成長期の考え方だった。今はものの豊かさより心の豊かさを重視すべき時なので、道路もリニューアルすべき。考え方をかえるべき。
- ・昔は道路で子どもが遊べたが今は遊べない。小さな公園は不要との意見もあったが、子どもが行けるところに公園がないのは困る。使われていないのは、なぜなのかを考えて、変えていくべき。
- ・建物を建てる時に、最初から自転車が止まることを前提に、駐輪場の義務化を。自転車は環境にもよい。「問題」といわれるのは心外。
- ・交通は自転車や公共機関を利用できることが大切。人が歩いているところをもう少し安全にしたい。
- ・安全で便利な移動手段の整備（あらゆる人にとって）。

（Bグループ）

- ・中原区も坂が少ない。車社会をやめたらどうなるか、メリットを考えながらまちづくりをしてはどうか。人が路面で遊べる、安心して歩ける、などのメリットがでてくるはず。
- ・川崎区は坂が少ないので自転車利用が有効。放置自転車については、発想を変えて、放置してもいいような公共物にするということも考えてみてはどうか。自転車利用を推進するために、自転車道も整備して欲しい。
- ・街路樹がかなり枯れはじめている。北部は車量が絶対的に多くて、北部の方が、むしろ南部よりも環境は悪化しているのではないか。その車量を減らすという対策を考えてもらいたい。そしてその車を減らすため、自転車を有効利用する。自転車も、むしろ乗り捨ててもいいようなシステムをつくっていったらどうか。坂がない、幸区、川崎区、中原区は自転車の有効利用を。

（全体会での意見交換）

道路は人のためにあるという言葉で集約されているが、バリアフリーとか、ユニバーサルデザインということは、道路だけではなく、建物もそうだし、小さな段差が障害の方を外に出にくくしているというようなこと、そういうところも基盤として共通認識を図っていく必要があるのではないか。

（凡例） 印 全体会での報告 ・ 印 グループ討議

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

【まちづくり、近接のまち、コンパクトシティ、(川崎区)】

A,B グループ共通の趣旨の議論	各グループ個別趣旨の議論
<p>(Aグループ)</p> <p>川崎は、海側は工業地で、だんだん山側に行って自然があってという形で、せっかく海があるのに市民が遊べる海がない。そういうことではなく、産業も集まりも遊ぶところも、教育やコミュニティーをさせる場所も、自然も歴史も文化も芸術も一つの近接したところで、みんなが享受できるようなまちづくりになってほしい。</p> <p>食・住・遊・育、いろいろな生活の機能が近接している町という中で重視されたのが総合的なコミュニティーのデザイン。機能別に、ここは工業地、ここは商業地、ここは住宅地というようなデザインは、以前の成長を目指しているデザインの考え方であって、これからの人間中心の考え方ではない。よって総合的なコミュニティーデザインをしていくべき。</p> <p>自然や歴史、文化を感じて暮らせる町。</p> <ul style="list-style-type: none"> 市全体は臨海部は工場地帯、こちらは自然が残る住宅地などと色分けしているが、これからは「どこでも住める」というコンセプトが重要。また、大きな施設は十分にある。むしろ小さな施設を自由に使えることにして、自分の文化や芸術をみせることができ、働く場もあれば理想的。住む・働くといった機能が一緒であることが理想的。川崎は海があるが海がない、そういうことは今後ないようにしたい。 これからの考え方を変えたい。工場が移転した後を有効に使って、市民が行かるところ（海など）が欲しい。どんな海でも見れば和む。 2つの視点が必要・・・「ピオトープネットワーク」(自然の中で生き物がずっと生きて行かれるためにはつながっていることが重要) <p>住民が自分が生活していく生活圏、あるところは一つの町内会かもしれないし、あるところは一小学校区ぐらいの幾つかの町内会が集まっているかもしれないが、それはその町の成り立ちや歴史により、自分たちが自治をするような範囲、自分たちがすぐに手を出す範囲というのは住民が決めていって、例えば町内会の次は「はい、区ですよ」ではなくて、だんだんに大きくなっていくまちづくりの考え方をしていきたいということで、コンパクトシティというキーワードが出てきた。これは言い</p>	<p>(Aグループ)</p> <p>環境教育、環境と言っても自然を大切にというだけではなくて、大きな地球の中で人間のあり方といったところに立ち位置を置いて、すべての川崎の子供たちは小さいときから段階的に学ぶようなプログラムを必ず受けられるような形にしていいたら、こういうものに対する根本的な考え方が育つのではないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ボランティア、福祉・環境関連は不足している。環境問題は基礎知識も必要。認識の問題も必要。それぞれが毎日実践しなくては行けない。車優先か人優先かなど、大きな考え方があって、意識が変わらなくてはいけない。小学校では町について学ぶが、環境教育についても強化してよいと思う。環境については基礎的な知識と意識が備わっていないといけない。 人と人との距離の取り方を重視する。人の言ったことをどうやって他の人に伝えていくかなど。これがすごく今分からなくなっている。挨拶以上に進まない近所関係が多い。子どもを預けられない人が圧倒的。これは怖いから。お互いが分からないから。まずはいろいろな人がいるという認識から始まる。人権と環境の教育は極めて重要。 外国人、障害者...など声を出せない人の声を通じる町へ。住所表示を道路基準に（今は平面的）。住民の声を集めているが活かしているのか。 都市マスの議論をしているが、住民の声を聞いたあと、どう活かして、どう活かさなかったのかの説明がない。2年間かけたが自分の意見の行き先がわからなく、むなしさを感じた。大人の居場所も欲しい。「市民主体」というときの「市民」はだれか。活動している市民は固定化している、これは課題。生活情報が届かない市民がいる。町内会は外国人、単身者等はずしている様子。

(凡例) 印 全体会での報告 ・印 グループ討議

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

かえれば、よく言われているサステナブルシティとか、サステナブルコミュニティとか、あるいは生活文化圏としてリージョンというのを考えるのと全く同じコンセプト。

コンパクトシティ、住民が自治範囲を決めて暮らしていくという中で、使い捨て用品を減らすとか、ごみを有料化するとか、基本的にはごみとかを出していかない、自分たちの町の中で循環するような生活にするという中で、こういった環境負荷などをかけていくようなものについては条例化するなり、有料化するなりという、具体的施策をとった方がいいのではないか。

自分たちの生活圏の中で、あそこの土地はだれだれ何々会社の物だから、マンションが建ってしまったら文句が言えないということではなくて、自分の生活圏の中は住民が自分たち、みずからデザインできるような仕組みをつくってほしい。

今ある施設をいかに壊さないで有効利用するかというところで考えてほしい。その中には歴史的に価値があるもの、あるいは産業遺産として価値があるようなものというのも、当然川崎市にたくさんあるであろう、そういったものを壊してしまわないで有効に使うためにはどうするか、それがその居場所として、どう使えるかといったことで考えてほしい。

・市民主体のまちづくりを進める上で、行政と市民の役割分担の1つのあり方として、アドプト・プログラム（維持を市民が里親として担う仕組み）制度を。まちづくりの規模を考える上で、コンパクトシティという概念を取り入れる。3~4万人の人口規模のエリアを1つの単位として自然環境、防災、環境、インフラなどの整備をしていく。

コンパクトシティ＝都市マスの議論をすると区も大きい、多摩区では5地域に分けて3万人の暮らしを考えている。そのくらいの規模で自律して考える。川崎市全体、多摩区全体ではなく、基本的なコンパクトな単位で街づくりを考えていく必要がある。川崎市の暮らしを3万人程度のコンパクトな単位で、コミュニティよりも少し広い単位くらいで考えるべき。自治会や町内会で街づくりを考えるべきだが、自治体の次が区ではなく、区をいくつかに分けたコンパクトな単位が必要で、それらのネットワークが重要。自治会個別の活動と区全体の動きでは議論がつかない。自治会と区の間をつなぐ仕組みが重要。

・よく言われるリージョン（生活文化圏）を住民自らが決めて、その中で循環型のまちづくりをしようという考え方に近いと思う。

（Bグループ）

開発、保全、利用については、開発の進んでいるところは開発を全くしないということではできないが、ただ開発を放置するというのではなくて、開発をしながら、それをどういうふうを利用して、また、全く開発をしないところも出てくるだろうし、残すところは残して、そして開発したところはちゃんと利用して生かすということに心がけたらどうか。

行政は事業者負担をもう一度考えるべき、住民のメリットがあるはず

- ・区役所を機能強化してもらいたい。
- ・小杉開発に行政指導が見えない。他地域での事例を勉強して、条例等で規制してもらいたい。
- ・溝口のような場所には用途地域に指定し規制をかけていく必要がある。高度規制をかけないと、100mを越すような建物ばかりになり、街が機能しなくなる。事業を開発、利用、保全で分類すると、溝口の例は開発になる。
- ・国は四全総で業務各都市という考え方を出し、五全総で環境影響評価を取り入れた。国だけでなく川崎市でも環境影響評価を行っていくことを考えるべき。
- ・自然は元に戻ろうとするから斜面緑地は防災に向かない。避難地は一箇所に集中させるのではなく、散在させる必要がある。
- ・開発事業者に適正な負担を求める必要がある。まちを壊すだけでなく、土地を保全することを考えて欲しい。

小杉から川崎から羽田をつなぐためにも小杉が重要。高層マンションではなく中低層マンションがよい

川崎区は、川崎の象徴であったわけだが、40歳代の30%は何らかの形で、いずれ出ていきたいという願望がある。そういう町というのは異常で、これからはずっと住んでいきたいというようなまちづくりをつくるためには、川崎市のルネッサンスというものを、中長期的に今から計画をもってやっていく。

・羽田空港への通過点ということ考えると、小杉駅だけでなく、川崎の顔である川崎駅も充実して行った方がよい。また、ミュージアム川崎などについても、川崎を売り込む材料として利用していくべき。

（凡例） 印 全体会での報告 ・印 グループ討議

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

- ・地形の問題や街づくりの経緯などもふまえて地区を設定していくべき。
- ・住民の希望が、町会があるが意見が吸い上げられていかない。地域づくりが町会と区だと駄目だとももっていたので、今の意見に同感。つながっていく仕組み
- ・社協と町会がうまく連携しているケースもある。身近な声を吸い上げてくれる中間的な組織が必要。
町会と区の間でコーディネートをする中間的組織が必要
- ・工場跡地がマンションになる、傾斜地がマンションになるなどといった動きに対して、大きな規制という考え方、個々バラバラではなく総合的なまちづくりが重要
- ・統一されたデザインなど・・・
- ・高さ制限をどうする、建坪率をどうするなど地域によって特徴はあるが・・・

（Bグループ）

- ・川崎区の40歳以下の人間は別な場所に移り住みたいという願望が高い。川崎区は住みにくいという印象を払拭し、職住が接近し女性も働けるような地域を作っていく必要がある。
また、別の産業に転換していくことも必要であり、IT関連産業、とくにソフトウェア産業などを活発化させる必要がある。
- ・川崎の海だけでなく、川や山など全てを含めてまちづくりを考えて欲しい。
- ・人口減少時代は持続可能ではない。作っては壊すということを繰り返しているだけでは持続は出来ない。快適な環境、安全な食品、住みやすい環境、こういったものなしでは将来を考えられない。具体的には、高層から中層への転換やゆったりとした道などが必要。国立市では条例で規制している。

総合計画市民会議の議論整理（まちづくり）

【自然、緑化、環境】	
A,B グループ共通の趣旨の議論	各グループ個別趣旨の議論
	<p>(Bグループ)</p> <p>多摩川のスーパー堤防を桜並木で覆ってはどうか 斜面緑地の保全を図って欲しい。マンションを建てて補強されたように言われているが、おかしいのでは。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業を実施するときにはアセスを行うが、壊された自然を回復する仕組みはない。緑の30プランだけではなく、深刻な場所を優先して保全していくような制度が必要。 ・斜面緑地は崩壊危険性が高いため、開発をしていくことには不安がある。 ・生産緑地は相続のときに失われる。手放された農地を市民農園にしていくなどの方向を考えていくべき。「梨は川崎」という言葉にあぐらをかいてはいけぬ。生産緑地は治山等にもメリットがある ・自然だけでなく観光についても川崎は恵まれているためあぐらをかいている。やっていることに慣れすぎてしまっはいけなく、トラスト運動が必要だろう。 ・屋上緑化については、マンションなどの屋上の他、川崎に多数ある研究所などの施設の屋上も対象にできるのではないか。 街路樹は今もあるが、自動車道でかれたまま放置されている状態で、なんとかしなくてはいいけない。 ・多摩川スーパー堤防をせっかく整備するのだから、自然面などで連携した動きが出せないか。マンションなどは作らなくてもよいが、鉄道を引いてくるなどは考えられるのではないか。 <p>(欠席者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然環境にも、与える人と与えられる人がいる。都市農業と緑保全について、都市農業の現状を知らずして論ずることはできず、市街化調整区域のあり方も考える時期と思われる。 ・多摩川河畔に揚水によるせせらぎ流水公園をつくる。